未来へつなぐ平和への想い

松江市立東出雲中学校　三年　　村上香菜

今の世界は平和でしょうか。今、私は平和のうちに生きているのだろうか。そんな疑問が湧いてきた今年の夏でした。

毎日、学校に通い、部活動をし、自分の将来の目標に向かって頑張りたいと思っている私。当たり前のことが当たり前に過ぎ去ることに何の疑問も持たずに時を過ごしている私。そのことが本当に幸せなことであるということを今、改めて感じています。

世界で起きている戦争や紛争、テロリズムで、多くの命が失われています。特に弱い立場にある子どもたちが多くの犠牲を受けています。戦争は最大の人権侵害だということはテレビや学校の授業で知っています。しかし、私たちのすぐそばで起きている出来事ではないので、それがどれほど大きな人権侵害なのかはよくわかりませんでした。しかし、この夏に日本で過去に起きた戦争のことから深く戦争と人権について考える機会がありました。

「未来ある青年たちに国のために死ねと教えた私の教育は何だったのかと。どんな意味があったのかと。そして今頃気づいたのです。私自身がそういう教育を受けてきたことに。国がそういう教育を行ってきたことに」教育は子どもたちに大きな影響を与えます。それが良い教育であっても、悪い教育であっても。

これは、学校で行われた戦争についての講演会で、加納佳世子さんがお話になったことです。佳世子さんの父である加納莞蕾が描いた「紫陽花」の絵に惹かれ、私は佳世子さんが名誉館長を務められている加納美術館を母と訪れることにしました。佳世子さんは私たちに莞蕾についてお話をしてくださいました。その時に聞いた莞蕾の生き方がきっかけで、私は、人権について考えることとなりました。

加納莞蕾は平和を願った一人の画家です。一九五三年、フィリピンのキリノ大統領が日本人戦犯の釈放を決意しました。その裏には莞蕾の四十三通にも及ぶ手紙を通した嘆願活動がありました。キリノ大統領は妻子の命を日本兵によって奪われていたことも知りました。しかし、それを知った上で送った第四書簡で莞蕾は「赦し難きを赦すという奇跡によってのみ人類に恒久の平和がもたらされるものなのだ」と大統領に涙を流しながら訴えかけたということです。莞蕾の思いがキリノ大統領に届き、憎しみの連鎖を断つために、日本人戦犯に特赦を与える運命の決断が世界に向けて発表されました。決してフィリピンの国民がこの決断を受け入れたのではありません。しかし、これからの未来でフィリピン人と日本人が良い交友関係を築いていくため、平和を目指していきたいというキリノ大統領の強い願いが込められていました。「紫陽花」の絵はその時に描かれたものでした。豊かに、また厳かに咲く紫陽花の花は命の尊厳を表しているかのように私には見えました。

キリノ大統領が託した思いにより現在日本はフィリピンとの良い関係が築けているということを私たちは知っているのでしょうか。戦争は最も人権を侵害している出来事だと思います。私たちは莞蕾とキリノ大統領の想いを引き継ぎ、教育を通して二度と戦争という過

ちを犯さないことが大切だと考えます。

今、ロシアとウクライナで大きな戦争が行われています。テレビで泣き崩れている人々を度々目にします。もし、この戦争が終わったとしても、ウクライナの人々の心、ロシアの兵士の心に安堵の思いだけが残るとは思えません。戦争は意味などあるのでしょうか？私には人権が大きく侵害された人々の悲しみしか感じることができません。なぜそれでも兵士は戦うのでしょうか？パレスチナとガザの紛争でも苦しい争いが続いています。パレスチナ問題は二〇〇〇年以上も前に起きた問題です。しかし、親から子へと憎しみが受け継がれていることが間違いだと思います。どちらかが「赦し難きを赦さ」なければ、この争いは終わることがないでしょう。

憎しみの連鎖は、人々の人権を奪い、平和のうちに生きる権利を奪います。今こそ、莞蕾の思想を知るべきだと思いました。また、私たち日本人は、そのことの意味をしっかりと知ることが必要だと思います。フィリピンで起きたことを知らなければなりません。今、私たちの身の周りに起きていないからといって、今ある平和や人権の保障が当たり前と思わず、平和に生きる尊さの意味を理解し、伝えることこそが人権を守ることに違いないと確信しています。

教育は子どもたちの考えや行動に大きく関わります。「ぜひあなたたちに父の想いを受け継いでいってほしい」と笑顔で話してくれた佳世子さんの平和への強い想いを私たちが未来につなげていかなければなりません。だから私もすべての人に人権が保障される世界となるように学校での学びを大切にしていきたいと思います。世界中で正しい教育がされ、戦争のない世界になることを心から願っています。